

「地産地消に関するエシカル消費の研究と啓発」活動紹介

経済学部学生研究室地域政策チーム

萩原翔・山田昇汰・足立結亮

目次

1. 当初の目標
2. 実施方法
 - (1) 協同での地産地消の実践と検証
 - (2) 地産地消をキーとしたつながりの充実
3. 実施状況や結果
 - (1) 近隣地域との協同で地産地消活動
 - (2) 普及啓発活動
4. 地産地消に関する提案とまとめ



1. 当初の目標

学生研究室のテーマ設定

「地産地消」（3年目）

→身近な野菜や米など農作物の生産と消費を実践しながら普及啓発を考える

—大学で自分たちができる社会実験—

◆【自由に】試す◆試すことから【楽しさ】を見つける◆身近な野菜の【生産・消費】の難しさ・楽しさを学ぶ◆大学の所在環境を【最大限に活用】する…など

2. 実施方法

（1）協同での地産地消の実践と検証

- ・畑や田んぼでの作物栽培（米、畑作物（野菜））
- ・学生の視点で地産地消にどう関わったのかを検証（近隣地域での参与活動）

（2）地産地消をキーとしたつながりの充実

- ・地産地消の認識を消費・生産分野に分けて、地産地消度をはかってみる
- ・地産地消に関わる中で、生産と消費について考える

3. 実施状況や結果

（1）協同での地産地消の実践と検証

- ・畑や田んぼでの作物栽培（米、畑作物（野菜））

①学内農地の管理・維持・活用

協同での野菜栽培から収穫まで行う地産地消の企画として、2024年度に「こまき地産地ショープロジェクト」と実施した夏野菜の収穫体験がある。

参加者の地産地消の意識もあり、エシカル消費の啓発として一定の成果があったといえる。ただし、収穫体験日まで野菜が上手に育たないなど農地管理の問題が発生した。そのため気候や農作業時間の制約を考慮し、2025年度は、農地での体験実施ではなく、農地の維持管理と収穫物のおすそわけを実施するにとどまった。



24年度の収穫体験の様子



自然農法での不安定な収穫



農地の維持管理の課題

- ・収穫体験が地産地消のナッジとなる可能性はある。
- ・機会の提供だけでなく、継続性まで含めた地産への接続手法を考える必要がある。

3. 実施状況や結果

(1) 協同での地産地消の実践と検証

- ・畑や田んぼでの作物栽培（米、畑作物（野菜））
- ②名経米の栽培（体験型授業のサポート）

地産地消活動の一つとして、大学付近の田んぼで、田植え→除草→稲刈りまでの行程に携わる（2025年度）。

11/15の消費生活フェアでは、来場者を対象に、収穫した米2合を先着順で配布するとともに、地産地消品である名経米ゴーフレットを配布し、来場者の地産地消度を聞いてみた。

10/11の大学祭（名経祭）では、JA愛知北と名経大の連携ブースに参加して、エシカル消費の普及啓発として、地産地消のポン菓子作成・配布を実施した。



田植え、除草、稲刈り、精米の行程体験



消費生活フェアでの、名経米、ゴーフレットの配布と、地産地消度調査



名経祭でのポン菓子配布によるエシカル消費の普及啓発活動

- ・大学の中での活動には制限があるため、広く普及啓発につなげるための仕掛けが必要。
- ・関連の行事あるいは連携の仕組みで、敷居の低い普及啓発の場が提供できるのでは。

3. 実施状況や結果

(2) 地産地消をキーとしたつながりの充実

- ・地産地消に関わる中で、生産と消費について考える

犬山ブランドトマト（おいしい花子）の栽培活動の見学や、近隣の桃農家（しのおかの桃）での、果樹園の土嚢づくりや木酢を入れる容器作成など、維持管理のボランティアへの参加活動を実施した。

おいしい花子は、犬山市地域農業活性化事業として、シルバー人材センターが主体となった園芸事業で、これまでもトマト栽培の体験（冬期の11～1月の3か月間）を体験するなどしてきた。しのおかの桃については、収穫時期を中心に、ボランティア募集の中での参加を続けてきた。



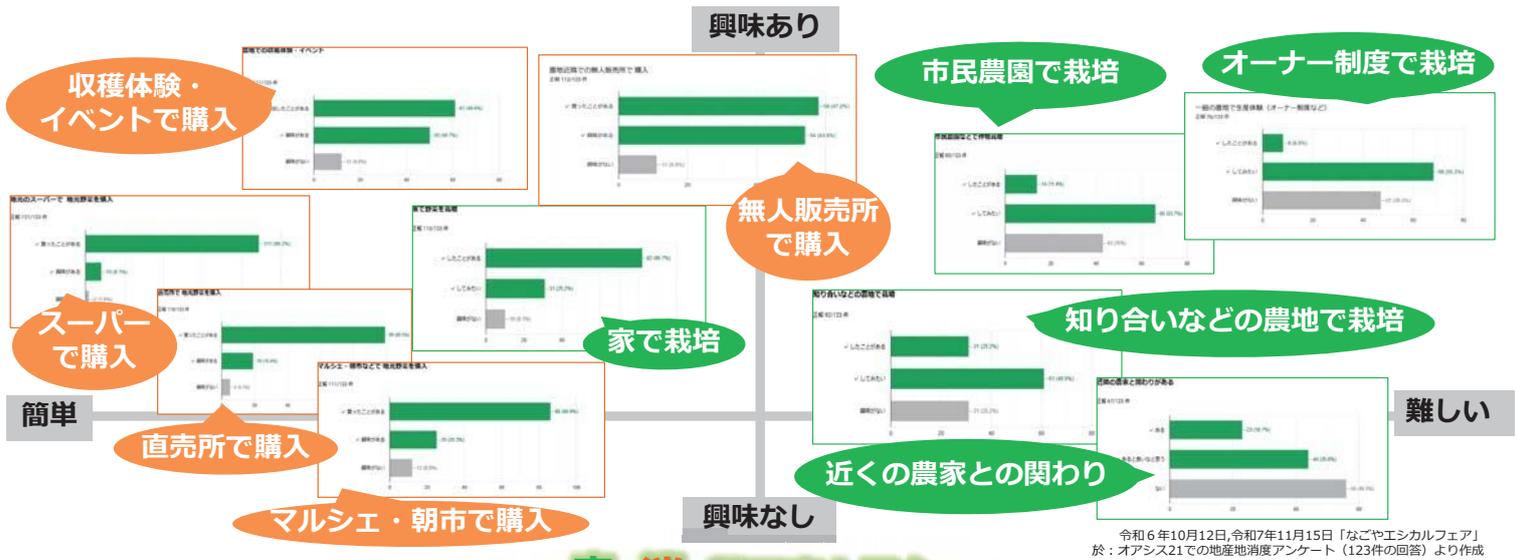
園芸施設（トマト栽培）の見学



桃農家の果樹栽培のボランティア

- ・体験やボランティアなどでの自主的な参与の機会を、定期的に提示する効果は高い。
- ・地産への関わり方は、いずれも敷居が高いと考えられ、導入時のサポートが必要。

・地産地消の認識を消費・生産分野に分けて、地産地消度をはかってみる



野菜の地産地消の難易度と関心を整理すると？

地産地消の今後の広がりについて

- ・消費分野・生産分野ともに関心度は高いが、生産分野の敷居が高いのが現状と言える。この敷居を下げるできないだろうか。
- ・小さな活動で十分だが、できるだけ敷居の低い地産活動への参加機会が広がる可能性はないか？
- ・例えば栽培するもの・農地の広さ・協同での作付け検討など、農地の管理の難易度を下げることができれば、地産の輪を広げられるのではないか。

4. 地産地消に関する提案とまとめ

① 楽田コミュニティでの普及啓発活動の継続

12/25楽田地域コミュニティが、地元の小学生低学年向けにクリスマス会を開催している。こうした場で、エシカル消費を紹介する機会を提供いただき、名経米ゴーフレットの配布を配布し、こどもから親へエシカル消費を伝えてもらえるよう普及啓発活動を継続している。

② 犬山市長と語ろう！に参加

1/15に、犬山市役所にて開催された「犬山市長と語ろう！」で、地産地消をテーマにエシカル消費の啓発活動として、今年度の活動紹介と、これまでの成果を報告した。

その中で、「地消」の視点から、自分たちが実施できた収穫体験のような小さな場が、犬山で広がるような仕掛けられるのではという考えを提示した。また、「地産」については、農地の維持管理や、作物の出来・不出来の大変さの中でも、自由に作物栽培などが楽しめた経験から、地域の生産者の取組を知ってもらったり、できるだけ敷居の低い農に触れる機会が必要と考える。その点では、大学の地域連携センターでは地産地消に関わる活動案内も多く、そうした犬山の特性から、「地産」に関わる人の繋がりの可能性について報告した。

